本日 東京医科歯科大学を卒業される皆さん ご卒業 誠におめでとうございます。

また、入学以来、長きにわたりご支援をいただいたご家族及び関係者の皆様に、心よりお礼申し上げます。

世界のコロナ感染者数が減少しパンデミック収束の兆しが見えはじめ、本日、4年ぶりに全学部学科合同で卒業式を開催できることを心より嬉しく思います。

トルコ・シリアでは大きな地震があり、多数の人が被災し、犠牲となりました。わが国でも12年前の3月には、東日本大震災を経験しました。

私の知人に、東日本大震災で被災された東北大学の教授がいます。教授は被災から半年ほど経った後に初めて「もう元には戻れない」ことを納得し受け入れたそうです。その結果、少しでも環境が良くなるように努力しようと思えるようになったそうです。周りを見ても、この「元には戻れない」ことを受け入れられるかどうかが心の復興の重要な分岐点になったとのことでした。

東日本大震災はほぼ一瞬にして約２万人もの方が亡くなりました。トルコ・シリア大地震では5万人を越える死者が出ていると聞きます。他方、コロナ禍は我が国だけでも3年間で7万人以上の方が亡くなりました。

コロナ禍は収束に向かいつつありますが、失われた大学生活の機会は戻らない。楽しみにしていた海外実習に行けなかった…課外活動も十分ではなかった…

この3年を振り返って、皆さん思うところが多々あると思います。

しかし、皆さんの将来は、「復旧」ではなく、「復興」を目指すしかないのです。

この3年間で失われたものを取り戻すという「復旧」を考えるのではなく、長い人生の中で、よりよい形で新たな機会を創出するという「復興」の考え方が大切だと私は思います。

いま世界の状況は日々変化し続けています。そのインパクトという点では、ウクライナ戦争に触れないわけにはいけません。今もなお多くの犠牲者が出ている様子が報道されており、私たちに大きな衝撃を与えています。コロナのパンデミックと併せ、私たちは疑いもなく歴史の転換点にいます。

偉大な科学者であるチャールズ・ダーウィンはかつて、「生き残るのは環境の変化に最も対応した生物である」と言いました。私たちは変化する状況に適応しなければなりません。

東京工業大学との統合は、まさに「環境の変化への適応」のひとつであります。新大学がこれからの「科学」の発展を担い、社会と共に活力ある未来を切り拓いていくという、強い意志を表現するため、新

大学の名称は東京科学大学としました。共に「科学」を追究し、新たな価値創造を希求する人のみならず、広く「科学」に興味を持つ人をも含めて、多様な人たちをこれまで以上に惹きつける大学でありたいと考えています。

皆さんは四月からは社会人1年生です。当面は、慣れないことも多く、自分でも「不甲斐ない」と思うことが多いのではないかと思います。しかし、失敗と捉えるのではなく、環境への変化、即ち進化のプロセスと考え試行錯誤を恐れず個人としてのチャレンジを続けていただきたいと思います。コロナ禍のさなかに、本学が大学を挙げてコロナに立ち向かった姿勢、すなわち「力を合わせて患者さんと仲間たちをコロナから守る」「試行錯誤を大切に」「責めるより応援する」は、学生として時を同じくした皆さんの心にも刻まれていると思います。ここから学んだことを忘れずに、これから幸せな人生を築いていってください。

コロナ対応を経て、日本で、東京医科歯科大学で学んでいると言えば、もはやどんな大学と説明する必要もなくなったと思います。それは皆さんの先輩たちひとりひとりの力によるものです。そして今後は、本日卒業する皆さんの更なる活躍が、統合後の新大学を、世界に通用する大学へと発展させることにも繋がると信じております。

皆さんにとって、東京医科歯科大学は母校です。母校とは、母港、母なる港でもあります。船は母港で整備を終えて長い航海に出ていき、次の航海に備えるために母港に戻ってきます。名前が変わってもこの地に母港があることに変わりはありません。

その母港にいる教職員一同、皆さんの幸せな将来を祈念しつつ、お祝いの言葉と致します。本日は誠におめでとうございます。

２０２３年3月１７日

東京医科歯科大学　学長　田中　雄二郎